

---

# 王女さまのゆびわ

野里ふうか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王女さまのゆびわ

### 【Nコード】

N5281E

### 【作者名】

野里ふうか

### 【あらすじ】

海にうかぶちいさな島。そこに立つお城に、王女さまが生まれた。健やかに育った王女さまだったが、大好きな友達とつぜん離れ離れになってしまう。無気力な日々を送っていた王女さまに、ある日ふしぎなゆびわが贈られる。

広い海に囲まれた、ちいさな島の上に、まっ白なお城がありました。お城には、王さまとお妃さま、めしつかいや兵隊たちがすんでいます。

ある日、お妃さまが赤ちゃんをうみました。

女の子の赤ちゃんです。

「王女さまがうまれたぞ！」とお城のみんなはおおよろこび。

王さまもお妃さまもにこにこして、ちいさなちいさな王女さまをみんなに会わせました。

王女さまは、昼は太陽の光にキラキラつまれ、夜は波の音をききながら、ゆりかごの中で眠るのです。

王女さまがよちよち歩けるようになったころ、お妃さまが王さまにいいました。

「そろそろ王女にともだちができるといいわ」

すると、王さまはうでぐみをして、こたえました。

「うむ。わたしもそう思っていた。しかし、この島にはおとなしくない」

ふたりは考えこんでしまいました。

すると、お城のまどをコンコンたたくおとがします。

王さまがまどを開けると、海からイルカが顔を出していました。

「王さま、お妃さま、こんにちは。王女さまに会わせてくださいな」イルカはチャプチャプ海にうきながら、いいました。

そこで、お妃さまが王女さまを抱いてきますと、

王女さまはイルカを見るなり手をのびし、しきりにさわろうとします。

それを見た王さまとお妃さまはよろこんで、イルカにこういいました。

「イルカさん。このことなかよくしてください」

その日から、王女さまとイルカはいつも一緒に遊びました。

イルカは、よく王女さまをのっけて海のあさいところをおよぎまわりました。

そのせなかにはあたたかく、王女さまは波にゆれながら、遊んでいるときに何度もいねむりをしてしまいました。

そういうとき王女さまは、自分がむかし聞いていた子守うたは、この海がうたっていたんだなあと知るのです。

それから、空はどこまでも高く、海はどこまでも深くまで続いていること。

王女さまは「世界」のことをイルカに教えてもらっていました。

しおかぜをすいこみながら、岩場に立って見上げた空、そこに広がる雲。

それはなんともすばらしい景色でした。

海に目をおとすと、そこにはいつもイルカがいて、やさしく王女さまを見ているのでした。

王女さまは、イルカと一緒にすごす時間がだいすきでした。

ほかのだれというよりも、楽しかったからです。

イルカとともにだちになってから何年かたったある日、王女さまはおひるごはんを食べてから、いつものようにイルカと遊ぼうとお城のなかをはしっていきました。

すると、めしつかいのひとりにドン、とぶつかってしまいました。

「しつれいしました、王女さま」

王女さまに手をだして立たせてあげためしつかいは、王女さまを見て、すこしむずかしい顔をしました。

「王女さま。今日もイルカと遊ぶのですか？」

王女さまがこくんとうなずくと、めしつかいはいいました。

「元気なのはたいへんよろしい。けれど、そのまっ白なドレスを毎

日よこして遊ぶのはよくありません。王女さまは、そろそろ勉強とマナーのれんしゅうもきちんとしなくてはいいけませんよ」

王女さまは自分の着ているドレスを見おろしました。

たしかにあたらしいドレスをきても、イルカと外で遊んでるうちにすそがよこれ、しわくちゃになってしまします。

ししゅうのはいったレースがびりつとさけたり、むねについていたしんじゅをいくつもおとしていたことだってありました。

かみのけも、朝どんなにきれいにゆってもらったって、夕方汗をいっぱいかいてお城にもどってくるころには、海の水にぬれてばさばさになってしまつのでした。

けれど王女さまは、まだこどもだからおとなの女のようにきれいにしていなくていい、と思っていました。ところが、お城のみんなはそう思っていなかったようです。

その日、めしつかいに色々ちゅういをうけてから、王女さまはイルカの待つ浜辺に行きました。

太陽が、いつもよりななめの空にありました。

王女さまはサクランボのようなくちびるをとがらせて浜辺を歩いてきました。

イルカはその顔を見て、すぐ気がつきました。

おとなのひとにおこられてしまったんだな、と。

イルカはいつものように王女さまをせなかにのつけて、ふだんよりもゆつくりと浅せをおよぎしました。

お城のまわりをぐるりと一周しているとき、王女さまにいいました。「王女さま。わたしはこれから勉強するために、すこし遠くにでかけます」

王女さまは、びっくりしてイルカの顔をのぞきこみました。

ゆうやけの光をうけてオレンジいろになった王女さまのほつぺた。

イルカのほつぺたも、すこし赤くそまりました。

「王女さまと遊んだ毎日を、わたしはわすれません。王女さまもわ

すれないでくださいね。わたしは勉強して、おとなになります。そのあと、またもどってきます」

王女さまには、イル力がなにをいつているのかよくわかりませんでした。

やがて太陽が海のむこうへすいこまれてゆき、あちらこちらで星がチカチカとかがやきはじめました。

王女さまを浜辺におろすと、イル力はしずかに海へもどっていきました。

王さまとお妃さまが、お城のいりぐちで王女さまをでむかえて、そつとあたまをなめました。

そしてその日をさかいに、イル力はお城の海からいなくなっていました。

それから十年くらいがすぎました。

王女さまはそのあいだずっと、おとなにかこまれて教育をうけました。

ちいさな島をまもるリーダーになるために、いろんなことを勉強しました。

国語、数学、歴史、科学。

そして、りっぱなレディになるために、れいぎさほう、げいじゅつかんしょう、おしゃれの勉強もしました。

けれど、ほとんどが王女さまのあたまの中をスルツとぬけてゆきました。

王女さまはことばもあまりはなしません。

ちいさいころとまるで別人のように、年中青白い顔をして、ぼんやりとソファアによりかかり、いつも天井をながめていました。

王さまも、お妃さまも、めしつかいも、兵隊も、おとなしすぎる王女さまがなにをかんがえているのかわからず、こまってしまうことがよくありました。

ある日めしつかいが、ずんどうの王女さまをすこしでも女らしく見せるため、コルセットでぎゅうつとウエストをしめていたときです。とつぜん王女さまは「ウギヤー」とさけび、めしつかいのうでにかみつきました。

めしつかいはひめいを上げて、へやを飛び出しました。

それから三日間、王女さまは自分のへやからでてきませんでした。めしつかいたちが王女さまをぶきみに思ったことは、いうまでもありません。

王さまとお妃さまは、ため息をつきました。

そんなある日、お城にふしぎなお客さんがやってきました。

それは、きらめくトパースの国からきたはかせでした。

勉強ぎらいでことばを話さない王女さまのうわさを聞いて、たすけにきたのです。

外国のお客さんをでむかえるときは、きちんとしたかつこうで会わなければなりません。

王女さまは、かみのけをたばねて、久しぶりにかんむりをつけました。なれないハイヒールのクツをはき、こしのあたりから大きくふくらんだドレスをひきずって、はかせをでむかえました。

メガネをかけて、ふしぎな形のぼうしをかぶった、男の人でした。

「はじめまして、王女さま。今日はプレゼントをおもちしました」  
うやうやしくおじぎをすると、はかせはたくさん宝石がついたちいさなはこを王女さまにわたしました。

はこをあけると、そこにはまばゆい金色の石がついたゆびわがありました。

「そのゆびわは、ちせいのゆびわです。それをつけると、王女さまは明るく、たのしく、なんでもわかるひとになれるのです」

王女さまがそのゆびわをまじまじと見ると、金色の石はすきとおっていて、そのおくからさらに強いひかりをだして、ピカピカピカとかがやいています。

なんてきれいな石。

気がつくと王女さまは、ゆびわを右手のくすりゆびにはめていました。

それからの王女さまの変わりぶりといったら。

まず、おしゃべりになりました。

だれとでもよくはなし、じぶんの思っていることをハキハキいえるようになりました。

そして、自分の知らないことを、わかるまでしらべるようになりました。

たとえば、食事のとき。

王女さまはお皿のうえにのっている料理をじーっと見ながらたべます。

たべおえるとすぐに、ひろい台所にいつて、コックにこうたずねるのです。

「わたしがいまたべた料理は、なにでできてるの？」

コックが「スケソウダラです」とこたええると、すぐに王女さまは聞きかえします。

「それは、なあに？」

「おさかなです」とコックがこたええると、王女さまはおじぎをして出てゆきます。

つぎにむかったのは、これもまた大きな図書室。

星のかずほどたくさんの本がならんでいるところですよ。

王女さまは本だなのあいだを歩きまわり、「さかなのずかん」をとりだしました。

そして、「スケソウダラ」の絵を見てから、びっくりしました。

小さいころに遊んだ海で、にたようなさかながいっぱいいたことを思い出したのです。

本をとじ、まどをあけて久しぶりに海をながめました。

「しらなかった。海って、およぐだけじゃなくて、おさかなをとっ



て食べるところだったのね」  
でだしは、こんなようすでした。

金色のゆびわをつけた王女さまは、それからメキメキ勉強するようになり、あつというまにいろんな学問をみにつけてしまいました。おぼえたことをあたまの中にとっておき、またあたらしくおぼえたこととまぜあわせて、自分なりのかんがえを生み出します。それを紙にたくさん書いて、作文にして先生に見せたりしました。島にすむひとたちがむずかしいことを話し合う「とうろんかい」に行き、声がでなくなるまでスピーチをすることもありました。

島のひとも、お城の人たちもびつくりです。

「あんなにおとなしくて、無口だった王女さまが」  
王女さまは、とくいげなきぶんでした。

むかしは王女さまにとって、絶対さからえないこわいものだったためしつかいたちも、今は王女さまのきではありません。  
なぜなら、王女さまはくちげんかすると、すかさず頭をはたかせて相手がなにもいいかえせないようなことをいい、だまらせてしまうからです。

島のひとも、お城の人たちも、じつはこう話していました。

「あんなにおとなしくて、無口だった王女さまが、口だけ元気になられた」

そのころ、お妃さまには気になることがありました。

「王女はすっかり明るくなったけど、あいかわらず体はじょうぶじゃないようだわ。頭がはたらくぶん、よけいに運動がめんどくさくなっているのかしら」

たしかに、王女さまはやせっぱちで青白いままでした。

人と話すとき以外は、図書館にこもりつきりで本をずっと読んでいるからです。

食事中も、本をかたてに、そばにいるめしつかいに話しかけてばかり。

かんじんなごはんをたくさんのかして、さっさと部屋にもどってゆきます。

これでは、元気な体になれません。

木のぼりしたって、すぐくたびれて「やあーめた」となるわけです。

そんなある日、お城にまたふしぎなお客さんがやってきました。

それは、もえるルビーの国からきたせんしでした。

黄色いふくばかりきていた王女さまでしたが、やはり外国のお客さまをでむかえるなら、きちんとしたかつこうにきがえなくては。

毎日はめていた金色の石のゆびわはそのまま、ドレスをひきずりでむかえました。

「はじめまして、王女さま」

おじぎをしたせんしは、まっすぐに王女さまの目を見ました。

「おや。王女さま、お顔の色がすぐれぬようですね」

どっしりひくい声がひびき、王女さまはなぜか体が動かなくなってしまうしました。

「そうでしょうか」

これだけいうのがせいっぱいでした。

「王さまとお妃さまは、あなたがじょうぶで健康な人になることをおのぞみです。まずは、お食事をしっかりとってください」

そういうと、せんしは自分の首からいくつもたれているネックレスのうち、ひとつをはずしました。

それは細かいくさりがいくつも連なっているもので、一番下になにかが光っています。よく見ると、真っ赤な石のついたゆびわでした。

「これは、ちからのゆびわです。王女さまにさしあげます」

ゆびわの石は、さわればやけどをしてしまうんじゃないかと思うほど、真っ赤っ赤なあかいろ。

そして、目の前のせんしのひとみのように、強い光をはなっています。

す。

王女さまは、その光にすいよせられるように手をのばし、ゆびわを左手のなかゆびにはめました。

さあ、その日から、また王女さまは変わりました。

今まであまりごはんをたべられなかった十年間をとりもどすかのように、たべる、たべる。

食事の時間になると、だれよりも早くせきにつき、めしつかいが運んでくる食事をあつというまにたいらげていきます。

海でとれたおさかなだけでなく、お肉もよくたべるようになりました。

おかげで王女さまの身長はぐんぐんのびました。

青白かった顔も、つややかなピンク色になりました。

むねもおしりも少し大きくなって、なんだか女の人らしくなってきたではありませんか。

元気な体になってきたおかげで、王女さまは前よりもよく体を動かすようになりました。

あれだけきょうみのなかった運動が、いまは楽しくてしかたありません。

晴れた空のしたで、へいたいたちと馬にのって狩りをするのがしゅみになりました。

木のぼりも大好きで、高い木のとっぺんまでどんどのぼりました。そしててっぺんになっている木の実をたくさんとりました。

「見て！このくだもの、私がとったの！とうさまとかあさまにあげよう」と

汗だくになって笑う王女さまを見て、へいたいたちも、めしつかいたちも、思わず顔をほころばせるのでした。

赤いゆびわをつけた王女さまは、図書室に行つて本をよむことはありましたが、前ほど長くそうしてはいられませんでした。

「字を追うより、シ力を追いたいわ」  
そんなことを思っ  
て本をとじ、図書室のまんなかでぐうぐう寝てしま  
うのでした。

そのころトパーズの国のはかせが、本をどっさり持っ  
てまた王女さ  
まに会いにきました。

はかせはてつきり、王女さまが勉強好きなままだと思  
っていました。  
トパーズの国の本を、島のみんなも読めるようにして  
ほしいと王女  
さまにおねがいしにきたのです。

ところが、王女さまは一冊の本にさらっと目をと  
おすと、こ  
ういい  
ました。

「なにが書いてあるのかよくわかりません」  
びつくりした  
はかせ。

だってその本は、「海洋学」という、海のつくりをくわ  
しく学ば  
た  
めの本で、王女さまが前に夢中で読んでいたから  
です。

「王女さま、どうしたのです？もう勉強にあきて  
しまったん  
ですか？」

そういつてからはかせは、王女さまが金色のゆび  
わをつけてい  
ない  
ことに気づきました。

かわりに真つ赤なゆびわが、左手でかがやいて  
おります。

王女さまは、立ちつくすはかせにくるりとせな  
かをむけま  
した。

「王女さま！頭のたいそうも大事です。あのゆび  
わは、決  
してす  
ては  
なりませぬぞ」

そ  
う  
い  
い  
の  
こ  
す  
と、はかせはたくさん  
の本を  
か  
か  
え  
去  
っ  
て  
い  
き  
ま  
し  
た。

王女さまはよくたべてよく運動しました。

そして、だんだん血の気のおおい、あばれんぼ  
うになっ  
て  
き  
ま  
し  
た。  
お城のみはりをしている兵隊に「すもうをとろ  
う」といい、こま  
ら  
せ  
た  
こ  
と  
が  
あ  
り  
ま  
す。

ドレスを着た王女さまとたいあたりするなんて、そりゃあやりにくいでしょう。

すると王女さまは大きなハサミを持ってきました。

そして、ドレスのすそをひざの上まで切ってしまいました。

ジョキ、ジョキ、ジョッキン。

王女さまは兵隊につかみかかると、そのまますごい力でなげとばしました。

「うわー。王女さまがあばれたした。だれか止める！」

あわててかけつけたルビーの国のせんしが、王女さまを押さえつけます。

「王女さま、おやめください。おてんばにも、ほどがあります」

王女さまのひとみは炎のようにゴウゴウともえていました。

「あなた、うるさいわ」

いうやいなや、王女さまはせんしの頭をぼかん！となぐりました。

きぜつしてしまったせんしは、王女さまのめいれいでそのままルビーの国へ送り返されました。

王さまとお妃さまはルビーのせんしに何度もあやまり、おわびとして、島いちばんのおいしやさんを送りました。

せんしは氷まくらをあたまにあてて、こういったそうです。

「王女さまは、もうすこし落ち着かれたほうが、いいようです。あのままではだれも近づけなくなってしまう」

どうやら、あたまを強くうたれて、自分があげた赤いゆびわのことはわすれてしまったようです。

王女さまはというと、それから勉強の時間をさぼっては森の中で狩りをしたり、舟にのって海の生き物をしとめて帰るといふ毎日を送っていました。

あるとき、とても大きなおさかながおよいでいるのを、舟のうえから見つけました。

波の下でゆうぜんとおよく黒いかげは、王女さまをさそっているようでした。

王女さまはヤリをしつかりかまえると、エイヤツとそれを海に投げ込みました。

みごとやりが命中し、大きなおさかながあらはれながら舟のうえに引き上げられます。

「あ、これはクジラだ！」

おともをしていた兵隊がさけびました。

「王女さま。クジラはイルカのしんせきみたいな生き物ですよ」

「イルカ？」

「ええ。王女さまがちいさいとき、遊んでいたでしょ」

きよとんとした王女さま。

かなしいことに、王女さまにはもうイルカと遊んだ日々がよく思い出せませんでした。

おぼえているのは、ひたすら草木のようにぼんやりすごした日々。トパーズのはかせと出会ってから、むちゅうで勉強した日々。

それからルビーのせんしと出会い、汗まみれでえものを追う日々。

だけど、「イルカ」という名前を久しぶりにきいて、なぜか王女さまのむねはチクリといたみました。

もう動かなくなったクジラをお城に持って帰り、ステーキにしましたが、王女さまはめずらしくのこしてしまいました。

部屋に入ってから王女さまは、しまいっぱなしにしていた、金色のゆびわをそつとり出しました。

なにも考えず、なにもはなせなかったころの王女さまに、トパーズのはかせがくれたゆびわです。

「これをつけて、私は勉強の楽しさをしっただわ」

そして左手に赤くかがやくゆびわを見下ろしました。

「このゆびわのおかげで、体もじょうぶになった」

では、この胸のチクチクはなんだろう、と王女さまは首をかしげます。

赤いゆびわをはずし、ふたつとも寝巻きのポケットにしまいました。

夜おそく、天気がくずれはじめました。

空は黒い雲におおわれ、しだいに風が強くなってゆきます。

やがてどしゃぶりの雨が降り出しました。

波はうねり、しずかだった海があばれはじめます。

眠っていた王女さまは、「ウオーン」というぶきみな声で、目を覚ましました。

まるでのらいぬがほえているような声が、海から聞こえてきます。

王女さまはベッドの中から、そっと顔を出しました。

おおつぶの雨がまどをばげしくたたいています。

どうやら荒れくるう海が「オオーン、オオーン」とほえているようです。

王女さまは、ふたたびふとんをかぶって眠ろうとしました。

そのときです。

あやしい気配がしました。

すがたは見えませんが、部屋の中にだれかがいる、と感じたのです。王女さまは体を半分おこして、目だけを動かし、あたりを見回しました。

胸のおくからしんぞうの音がひびいてきます。

勇気を出して、見えないだれかに向かって声をかけてみました。

「そこにいらっしゃるのは、どなた？」

と、部屋にかかっている厚いカーテンが、わずかにゆれました。そのかげからカーテンとちがう色の布が見えています。

そしてそこから、背のひくい人物が、のっそり出てきました。

「い、ひ、ひ、ひ。おそい時間に失礼しますよ」

その人は大きな布でできた服に身をつつみ、その布で頭からつま先までがおおわれております。

まるで本に出てくる魔法つかいのようないでたちでした。

深くかぶったころもの下はかげになっていて、顔がよく見えません。声は低くしゃがれていて、服のすき間からのぞくうでは枯れ枝のように細く、シワシワです。

そして、顔がわからないかわりに、まっ白な長いかみがたれているのが見えました。

どうやら老人であるようです。

ぶきみな来訪者にすっかりめくらった王女さまでしたが、それに気づかれないよう、あえて落ち着きはらったようすで老人をなぐめました。

「こんばんは。雨宿りをしにきたの、おばあさん？それとも、おじいさんかしら」

すると老人の口から、ヒ、ヒ、ヒとしわがれた声がもれてきました。「あんたにちよいと用があつてきたのさ、王女さま。あたしゃあ、サファイアの国でうらないをしてるもんだよ。人からは、魔女とかよばれているけどね」

「うらない？」

「そうさ。あんた、とんでもないわがままばっかしてるだろう。知ってるよ」

王女さまは、さすがにムツとしました。会ったばかりの人にそんなことを言われるすじあいはありません。

「出て行ってください。こんな時間に私の部屋にしのびこむなんて、おばあさんといえどゆるさないわ」

老人は、顔を上げて王女さまを見ました。

ちょうどその時、まどの外でかみなりがピカツと空をてらし、老人のしわくちゃな顔が王女さまの目に飛びこんできました。



おちくぼんだふたつの目玉がこちらをにらみつけています。

「ゆるさない？ゆるさないって、あんたどうするつもりだい」

「めしつかいと兵隊をよびます。そうすれば、あなたはころされるでしょう。早く出て行って！」

いきなり老人がけたたましい笑い声を上げました。

「ころす？ころすだって？ヒ、ヒ、ヒ！おそろしい王女さまだ」

王女さまはあつけにとられました。

目の前の老人のほうが、よほど自分よりおそろしいではありませんか。

笑いながら、魔女は王女さまに近づいてきました。

「こわがらなくていいよ。あんたにあげたいものがあるんだ。これを受け取ってもらえりゃ出て行くさ」

魔女は右手をすつと前に出し、長いつめのついたゆびから、ゆびわをはずしました。

おそろしげな魔女に不似合いな、深く、それでいて淡い光をおびた青い宝石のついたゆびわでした。

「ほうら、きれいな石だろう。この青い光を見ているだけで、心はやすらぎにみたされていく。これはちゃんもくのゆびわだ。今のあんたは、あわただしすぎて本当の自分をみうしなってしまうてるね。

この青い石が、あんたに正しい道を教えてくれるよ」

魔女は、なだめるようにゆっくりと王女さまに語りかけます。

青い石のゆびわも、王女さまを包みこむかのように、大きく光っています。

青い光をうつした王女さまの目は、しだいにうつろになってゆきま

す。

「でも私はもう、きれいなゆびわをふたつも持っています」

魔女が耳元でつぶやきました。

「両方、いらないよ。もうつけなくったって、いいじゃないか」

そして王女さまの左のくすりゆびに青いゆびわをはめました。

あらしはいっこうに止む様子もなく、海はうずをまいて、踊り続けます。

空はもう真っ黒な雲におおいつくされ、星も、月も見えません。時おり暗い空をまっぷたつに切りさくかみなりが、ばりばりとおそろしい音をたてて空気をふるわせます。

高い波がくだけちつて、島の浜辺におしよせてきます。

あまりの天候の荒れ具合で、お城の人たちはつぎつぎ目を覚まし、あかりを手に持つてろうかに出てきました。

王さまとお妃さまは、お城のみんなを広間にあつめました。兵隊がみんなに注意をよびかけます。

「強い風で、まだガラスなくつかわれている！はだしの人は、クツをはきましょう」

そこへ、めしつかいが何人かあわててかけつけました。

「王さま、お妃さま。王女さまがいらっしやいません！」

二人は顔を見合わせました。

王さまは顔色をかえてさけびました。

「外に出るのはきけんだ。城の中をもう一度よくさがすのだ」

兵隊もめしつかいも、手分けして王女さまのいそうなところを探しまわりました。

ところがその頃、王女さまはなんと浜辺に立っていました。

吹きつけるあらしの中で、王女さまは海を見つめていました。

魔女はもう、いません。

青いゆびわが、王女さまを海まで連れてきたのです。

海は青く、黒く、うずをまいています。

泡立てすぎたクリームのように、波の先はするどくがっついていました。

「ウオーン」とほえながら、波がくだけで、すぐ近くにせまってきました。

こんな海は見たことがない、と王女さまは思っていました。

青いゆびわから、魔女の声が聞こえてきて、王女さまにこう語りかけます。

「海はおこっているんだよ。あんたが海の生き物を、たくさんころしてしまったから。食べたいぶんよりも多く、さかなをとってしまっから。きのうあんたがやりでしとめたクジラも、かわいそうにね」

雨まじりの風が吹きつけ、王女さまは砂浜でころびました。

青い光がいつそう大きく、王女さまに呼びかけます。

「なんてかってなんだい？ 勉強にあきたとたん、トパーズのはかせをながしろにしたり。元気な体になったら、ルビーのせんしをなぐって追いつたり。お城のみんなが、王女さまにうんざりしているのさ」

王女さまは、なみだを流しました。

青いゆびわから聞こえる声は、王女さまをひどくきずつけました。

たしかに王女さまは、自分のことしか考えていませんでした。

ようやく気がついた今、けれども、強いかなしみだけが王女さまにおそいかります。

自分でも、どうしてこんなになんしい気持ちになっているのかわかりません。

寝巻きのドレスは、雨と砂でくちやくちやになっています。

かみの毛もぼさぼさで、海草がからまつていました。

なさけなくって、かなしくって、王女さまは泣きじゃくりました。

「私は、どうしたらいいのかしら」

王女さまは、泣きながら海のほうへ歩いてゆきました。

波がおしよせるたび、水しぶきが顔にはねてきます。

くちびるをかみしめると、なみだなのか海水なのか、しょっぱい味がしました。

もしだれかが、海の中をどんすすんでゆく王女さまを見ていたとしたら、まるで海に落としたなにかをさがしているかのように見

えたでしょう。

腰のあたりまで水につかりながら、なおも王女さまは手をのばし、先へゆこうとします。

そこへ、今まででいちばん大きな波がやってきました。

波はザブウン、と王女さまをのみこみ、冷たい海の中へとさらっていききました。

深くてくらしい海の世界。

長いかみとドレスをたなびかせ、ただよう王女さま。

上にあがろうとしますが、いきが苦しくて体が動きません。

青い光をとめたゆびわから声がきこえました。

「このままお眠り、王女さま。海の中で、しずかに眠りつつけるのさ」

そうしたほうがいいのかもしれない、と王女さまは思いました。

「お城にもどつても、私はきつときらわれてるもの。眠ってしまおう」

王女さまは目をして、水底のながれに身をまかせてみました。けれど、それはむりでした。

いきが吸えないと、つらくてたまりません。

それに海の底はさむすぎました。

これは、しずかな眠りどころではありません。

がまんできず、王女さまはさけびました。

「いやだ。こんなところで死にたくない」

するとそのときです。

むこうから、海の中をおよいでくるものがありました。

それは、王女さまとおなじくらい大きなおさかなでした。

真つ暗な海の中をかきわけるように、おさかなは王女さまに向かつておよいできます。

その姿がゆびわの光にはつきりとうつし出されたとき、王女さまはおどろきました。

ああ、まさか。もしかして。

「おひさしぶりです、王女さま。いま、お助けします」  
あまりにもなつかしい、イルカの声！

そこで、王女さまは気をうしなうてしまいました。

やさしい歌がきこえてきます。

小さいころに毎日きいていた、海からの子守りうたです。

目を開くと、ほっぺにあたたかな光を感じました。

それは、東の空からのぼらんとする、太陽の光でした。

反対のほっぺたにはしっとりとした別のぬくもりを感じます。

イルカが、王女さまを背中につけて海の上をおよいでいるところでした。

王女さまは、ゆっくりと体をおこしました。

あらしはうそのように去っていて、海はしずかに波うつています。  
頭の上には、まだ夜のなごりのようなうすムラサキの空がありました。

そして羽根布団のようなわた雲がまとまったり、ちぎれたりしながら、ゆったりうかんでいました。

「ああ王女さま、気がつきましたか。よかった」

イルカの声がきこえました。

「きのうの夜は、大荒れでしたね。十年ぶりにもどりましたが、まさか王女さまと海の中でお会いするとは思いませんでしたよ」

王女さまは、オレンジ色に照らされたイルカの背中をにらみました。  
「イルカがいなくなつてから、ずっとつまらなかったのよ。私たちは親友でしょう。とつぜん行ってしまふなんて、ひどいじゃない」  
イルカはちよつとおどろいてから、あやまりました。

「ごめんなさい」

「また、私のそばにいてくれる？」

「もちろんです。そのために帰ってきたんですよ」

王女さまは、今度は胸がぐうつと苦しくなりました。つらいわけで

はありません。すごく安心したのです。

そして、こんなにしあわせな心地になったことがあるだろうかと思いました。

「あ！早くお城にもどらなくちゃ。とうさまとかあさまが心配しているわ」

「はい、急ぎましょう」

イルカは足を速めて、陸のほうへとおよぎます。

ずぶぬれだったドレスも、日差しにあたたかさで、だんだんかわいてゆきました。

「ところで、イルカはなにを勉強するために出かけたの？」

王女さまはたずねました。

イルカは、すこしだまって、こう答えました。

「じつは、人間になる方法を探しに行つたのです。海にいる仲間たちから、ある言い伝えをきき、ずっと旅をしていました。けっきょくそれは見つからなかったのですが。それでも、色々な海を見てこれて、たくさんの世界を知ることができました」

波のむこうに白い砂浜が見えて、お城がだんだん近づいてきました。イルカの声に耳をかたむけながら、王女さまは、お城でまっているみんなのことを思いました。

王さまとお妃さま。めしつかいと兵隊たち。

それから、いつもおいしい食事を作ってくれるコックさん。きのうの嵐で、だれもけがしていないかしら。

帰ったら、最初にみんなにごめんなさいと言わなくちゃ。

それから、いつもありがとう、と言おう。

イルカは話しつづけました。

「王女さまは、ごぞんじですか？みつつのゆびわのお話を」

ゆびわ、と聞いて王女さまはドキリとしました。

「ゆびわ、ですって？」

「ええ。海の仲間たちのあいだでは有名な話です。頭がよくなるト

パールのゆびわ、力がわいてくるルビーのゆびわ、それから自分を見つめられるサファイアのゆびわ。このふしぎなゆびわを全部見つけると、わたしたち海の生き物は、人間になれるといわれているのです」

王女さまは、じつと話を聞いていました。

左手には、魔女からもらった青いゆびわは、ありませんでした。

たしかイルカが助けにきたときまではめていたはずでしたが、もしかすると、海の上まで引き上げてもらうときに落としてしまったのかもしれない。

寝巻きドレスのポケットに手を入れてみましたが、金色のゆびわも、赤いゆびわも、おぼれてたときになくしてしまったようです。

イルカが探しに行ったものを、王女さまは手に入れていて、なくしてしまったのです。

王女さまは、イルカに打ち明けるわけにもいかず、ちいさくため息をつきました。

けれども、探し物が見つからなかったわりに、イルカは元気そうでした。

「どうしました、王女さま？」

と、鼻歌まじりに聞いてきます。

「うっん、べつに」

王女さまはイルカに気づかれないように、こっそり鼻をすすりました。

「王女さま。また一緒におよぎましょう。一回おぼれたからって、海をきらいにならないで下さいね」

「もちろん。私もイルカほどじゃないけれど、およぐのは上手よ」

イルカに乗った王女さまは、広がりはじめた朝の空をあおぎ見ました。

それからふと首をかしげて、イルカにたずねてみました。

「どうしてイルカは、人間になりたいって思ったの？」

「私も人間になって、陸の上を歩ければ、いつもあなたのおそばに  
いられるからです」

王女さまは、イルカってわからないことばかりいうわ、と思いました。  
た。

「私とあなたは、一緒にいたいと願えば、いつも一緒にいられるは  
ずよ。だから安心して。私は、イルカのあなたが好きよ」

イルカは顔をあげて王女さまを見ました。

むかしより、ほんのすこしたのもしい顔つきになった王女さまが、  
笑っておいしました。

「うれしいです。王女さまも、わたしがいない間にいろんなものを  
見つけたんですね！」

「ええ、まあね。いろいろ」

最後のほうはちょっとばかり、言葉をにこしてしまふ王女さまでし  
た。

（イルカが探していたゆびわのことは、ないしょにしくっちゃ）

（王女さまに、プロポーズをするのはもう少し先にしておこう）

王女さまとイルカは、おたがい胸にちいさなひみつをしまいこみ、  
島へと進むのでした。

のぼりつづける太陽の光が、あたたかく降り注ぎます。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5281e/>

---

王女さまのゆびわ

2010年12月21日01時49分発行